

# 幼児の生活習慣と心理的発達

——人物画描出への着目から——

末 次 絵 里 子\*

## Lifestyle Habits and Psychological Development of Infants

——A Focus on Draw a Man——

Eriko SUETSUGU

**Key words** : 人物画 draw a man, 幼児 young children, 発達 development, 生活習慣 life style

### 1. 問題と目的

昨今の子どもたちは、人生にとって重要な経験となるはずの、遊びを中心とした生活形態も時代と共に大きく変化し、身体を用いることが減り、外遊びが減り、その代わりに電子機器文化が子どもを一層取り巻くようになった。ゲーム等に夢中になることや大人の生活スタイルの影響から睡眠時間が短くなっている可能性もある。こうした生活の背景や習慣が、子どもたちの心理的発達にどう影響を与えているのだろうか。

子どもの心理的発達を見ていくことのできるツールの一つとして挙げられる人物画は、「セルフイメージ」が描き出されやすいため、時代と共に変化する生活環境・文化の影響を受ける子どもの心と身体の今、つまり現実の姿を視覚的に表す。それ故、人物画活用は、周囲の大人に子どもへのかかわり方や子どもの生活スタイルの在り方・質の是非を示唆するものとして有効である。心理アセスメントの一環として人物画を用いる場合、知的発達の評価としての利用と、パーソナリティ投影法としての利用が一般的である。グッドイナフ人物画知能検査 (Goodenough Draw a Man Test ; 以下, DAM) は、日本においては小林によって1977年に標準化され、臨床の現場で主に動作性の知的発達評価の方法として活用されてきた。子どものアセスメントにおいては、パーソナリティを見ていく上でもまずは発達の状態像をとらえておくことが必要であることから、DAMによって精神年齢 (MA)、そして知能指数 (IQ) を算出することには意義がある。

現代の子どもの描画発達については、郷間、大谷、大久保 (2008)<sup>1)</sup> が、その遅れについて指摘し、現代の子ど

もの発達は図形模写などの描画の面から見た場合、軽度の発達障害児と同様の特徴を有するようになってきた、もしくは同様の特徴を持つ子どもが増えてきた可能性が推測される、としている。そして、子どもたちの描画発達の遅れの詳細やそれに対する対応を探るため、子どもの生活習慣や生活環境との関連について検討していくことを課題として挙げている。子どもの生活習慣と描画発達に関しては、鈴木、野村、瀬川 (2003)<sup>2)</sup> が、5歳児の睡眠-覚醒リズムと三角形模写との関連性を調査して報告し、倉原 (2017)<sup>3)</sup> も、睡眠-覚醒リズムの不整が描画発達に及ぼす影響について指摘し、幼児の生活リズムを整えていくための保育現場の役割の重要性に目を向けている。

そこで今回、ある幼稚園の園児たち (年少児～年長児) を対象に、グッドイナフ人物画テストを実施すると共に、保護者に対するアンケート調査を行い、子どもの遊びを含めた生活習慣と人物画描出との関連性を見ていくこととした。子どもの発達の状態像を少しでも把握することにより、心身の健全な成長・発達を支えていくために必要な手立てを検討する示唆を得たいと考えている。

### 2. 方 法

#### 1) 描画調査について

対象児 : A県B市のC幼稚園の園児 (年少児クラス27名, 年中児クラス25名, 年長児クラス25名) を対象に人物画調査を実施した。

実施時期 : 第1期は20xx年7月, 第2期は4カ月後の20xx年11月, 第3期は第2期から7カ月後の20xx年6月であった。

手続き : 教示は筆者が行い, 各担任教諭が補助的役割で

\* 広島文化学園短期大学保育学科

対応した。対象が幼児であることから、描画を無理強い  
はしないようにした。また、使用する黒色ペンを口に入  
れたり、周りの人の目に向けてたりすることのないよう、  
感染予防対策としても、密にならないように、座席の位  
置の間隔を空けた座り方など、十分に配慮した。すでに  
園での感染予防対策として、座る際には4人掛けの机に  
2人が斜めに座り、園児同士が隣接したり、向き合うこ  
とのない座り方になるよう設置がされ、さらに真中に  
フェイスシールドが置かれている環境が作られているこ  
とから、その環境を利用した。

## 2) 保護者へのアンケート実施について

(年少児クラス27名、年中児クラス25名、年長児クラス  
25名のすべての保護者が対象)アンケート用紙に、個人  
情報の保護について、また回答は自由意思によるもので  
ある旨の説明文を記載した。保護者への配布と回収につ  
いては幼稚園に委ねた。

アンケート内容：生活習慣に関する調査として、平日と休  
日の起床時間、就寝時間、朝食・夕食の時間、習い事の有

無、好きな遊び、外遊びの週当たりの回数、その他、自由  
記述として、子どもの心身の健全な成長・発達のために心  
がけていること、今後実践したいことなどを項目に入れた。






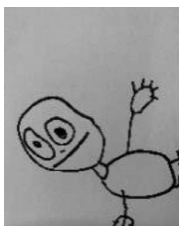
## 3) 倫理的配慮

個人情報の取り扱い等について十分配慮すると共に、  
幼稚園の教育時間内の活動の一環であるということで、  
園長先生より対象園児と保護者に事前に説明の機会を設  
けてもらい、了解が得られた上で実施した。個人が特定  
されないよう、A・Bのアルファベット表記を用いると  
共に、時期や場所が特定できる記述を省いた。また、広  
島文化学園大学倫理委員会の承認を得て行った。

## 3. 結 果

### (1) 描画変化の検討事例

ここでは、結果の一部を抜粋して、事例検討として、第  
1期時に年少児クラスだった、A児、B児、C児、D児、  
E児、F児、G児、H児、I児、J児の10名を取り上げる。

	○人物描画と、DAMによる分析評価 (DAM-MA, DAM-IQ) ○描出についての所見			生活習慣調査より(抜粋) 1) 起床・就寝時間 2) 好きな遊び 3) 外遊びの回数(週当たり)
	①第1期	②第2期 (第1期から4ヶ月後)	③第3期 (第2期から7ヶ月後)	
A (男児)	○ CA3:4 MA3:4, IQ100 	○ CA3:8 MA3:11, IQ107 	○ CA4:3 MA4:11, IQ116 	1) 平日も休日も朝6時30分 起床, 9時就寝 2) ポケモン人形で戦いごっこ 3) 2回
B (男児)	○ CA3:6 MA3:6, IQ100 	○ CA3:10 MA4:4, IQ113 	○ CA4:5 MA5:5, IQ123 	1) 平日は7時までに起床, 8時就寝, 休日は7時30 分までに起床, 9時就寝 2) プラレール, ままごと 3) 2回

<p>C (男児)</p>	<p>○ CA3:3 MA3:4, IQ103</p>  <p>○ふわふわとした描出が、マイペースさのあるC児の印象と重なっている。</p>	<p>○ CA3:7 MA4:1, IQ114</p>  <p>○頭に続いて身体を描こうとしていた様子であった。頭の下部に描かれている丸い形状のものが身体部分になったと思われる。</p>	<p>○ CA4:2 算出不能</p>  <p>○描きながら「高速道路」と語られた。こだわりが日常の中でも強くなっているという情報が保育者から得られた。</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 平日も休日も朝6時起床、夜8時30分就寝</li> <li>2) 車のおもちゃ、音楽の鳴る太鼓</li> <li>3) 1回</li> </ol>
<p>D (女児)</p>	<p>○ CA3:9 MA3:11, IQ104</p>  <p>○力強さが外に向かって表出されている印象を受ける。</p>	<p>○ CA4:1 MA4:0, IQ98</p>  <p>○頭の部分から左右に出ている線は頭髪にも見え、腕とも、あるいは指とも考えられる。</p>	<p>○ CA4:8 MA4:7, IQ98</p>  <p>○胴体、腕、脚が、それとわかるように描出されている。</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 平日は朝6時起床、夜9時就寝、休日は朝7時起床、夜9時30分就寝</li> <li>2) 戦いごっこ</li> <li>3) 3回</li> </ol>
<p>E (女児)</p>	<p>○ CA3:5 MA3:8, IQ107</p>  <p>○胴体や脚が生まれてきている。少し弱々しく縮こまっている印象を受ける。</p>	<p>○ CA3:10 MA4:10, IQ126</p>  <p>○頭髪が覆いかぶさるかのよう描かれている印象である。服もきちんと描かれているが、防衛的な印象を微妙に受ける。</p>	<p>○ CA4:4 MA5:9, IQ133</p>  <p>○描いた後、「ままとE(自分)」だと言う。頭には、頭髪に加えて帽子が描かれている。</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 平日は朝8時起床、夜10時就寝、休日は朝10時起床、夜12時就寝。</li> <li>2) お絵描き</li> <li>3) 3回</li> </ol>
<p>F (女児)</p>	<p>○ CA4:0 MA4:7, IQ115</p>  <p>○表情の良いF児の印象と重なる、のびやかな描出である。耳の大きさが目立つ。</p>	<p>○ CA4:4 MA4:10, IQ112</p>  <p>○4ヶ月後の描出でも①とよく似た構図の画である。F児の姿をよく表している印象である。</p>	<p>○ CA4:11 MA5:6, IQ112</p>  <p>○描いた後、「ままとF(自分)」だと語られた。帽子を含め、装飾が豊かに描かれている。</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 平日も休日も朝6時30分起床、夜8時就寝</li> <li>2) ごっこ遊び</li> <li>3) 2回</li> </ol>

<p>G (男児)</p>	<p>○ CA3:3 MA3:4, IQ103</p>  <p>○意味付けられた描出が開始してきている時期という印象である。</p>	<p>○ CA3:8 MA 3:8, IQ100</p>  <p>○ぐるぐるまるだけでなく、目や口など、それぞれの部位と思われる描出が見られる。</p>	<p>○ CA4:2 MA3:8, IQ88</p>  <p>○目や鼻や口のある円から多くの線が表出されている。勢いが感じられる。</p>	<p>1) 平日は7時起床, 20時就寝, 休日は7時30分起床, 20時就寝 2) ままごと, 子どもチャレンジ 3) 2~3回</p>
<p>H (男児)</p>	<p>○ CA4:1 MA3:1, IQ76</p>  <p>○いっしょうけんめい意味付けの描出を行っている。</p>	<p>○ CA4:5 MA4:6, IQ102</p>  <p>○髪として描かれている, 上に伸びる線に勢いある。</p>	<p>○ CA4:11 MA5:2, IQ105</p>  <p>○腕や指が出てきて, 頭は大きい, 全身が意識されている。</p>	<p>1) 平日も休日も6時30分起床, 19時30分就寝 2) 虫捕り 3) 7回</p>
<p>I (女児)</p>	<p>○ CA3:4 MA4:5, IQ133</p>  <p>○上半身が生き生きと描かれている。そのため, 一層, 脚の描出がないことが気になる。</p>	<p>○ CA3:9 MA3:10, IQ102</p>  <p>○生き生きとした印象は変わらない。やはり上半身中心である。</p>	<p>○ CA4:3 MA4:10, IQ114</p>  <p>○脚の描出が明確になっている。服の装飾, 頬の強調が特徴的である。</p>	<p>1) 平日は6時45分起床, 21時就寝, 休日は7時起床, 21時30分就寝 2) 外遊び, ブロック, 折り紙, ごっこ遊び 3) 5回</p>
<p>J (女児)</p>	<p>○ CA3:9 MA3:6, IQ93</p>  <p>○頭, というより「顔」, 「表情」へのこだわりが目立つ。</p>	<p>○ CA4:1 MA3:8, IQ90</p>  <p>○「顔」を囲むぐるぐるまるは, 「人の全体」, たくさん出ている線は, 本児のエネルギーの「はたらき」。</p>	<p>○ CA4:8 MA4:3, IQ91</p>  <p>○目や鼻や口などが描かれた丸から, 「脚」に見える線が描出されている。</p>	<p>1) 平日は6時15分起床, 18時就寝, 休日は7時起床, 20時就寝 2) ジグソーパズル, テレビ, ネット動画, タブレット鑑賞 3) 1回</p>

図1 年少児10名の人物画描出と所見, 生活習慣調査データ抜粋

描画変化の検討について

A～Jの、第1期から第3期までの描画変化を見ると、ひとりひとりの個性的な描出が、第1期から第3期まで、一貫している印象を受ける。保護者を対象とする生活習慣調査との関連では、就寝時間が遅いケースは、対象児が一人っ子である場合や、年の離れた兄・姉がいる場合が多かった。そういうケースでは、描画は、少し抑圧の強い印象や、評価を意識して描かれている印象を比較的強く受けた。「外遊び」の週当たりの回数が多いのも、年の近い兄弟がいるケース、「ごっこ遊び」が多いのも、年の近い兄弟がいるケースである様子がうかがえた。「好きな遊び」として、「テレビ」や「動画」などの視聴をあげていない場合も、自由記述を見ると、「テレビはつけっぱなし」であることや、「動画」の視聴やゲームなどは日常的なツールであることから、「好きな遊び」として敢えて特別に掲げる対象でない、と解釈できる内容が目立った。全般的に視覚的な刺激は多く受けていることが推測できる。

Cについては、第3期で「人物」の描出ではなく、「高速道路」を描いている。Cは徐々に対人関係面の特徴、具体的には、微妙に衝動性が高く、マイペースであり、他者との関係性の構築に難しさが見られる様子がより明確になってきていた。月齢が進むと共に、他児との異なる特徴が目立ってきていたが、その難しさが描出においても浮き彫りになった。

(2) 特徴的な描出について

筆者はすでに、保育園児を対象に縦断的描画調査を実施し、結果を分析している。その分析結果も参考にして、今回の特徴的な描出を見ていくこととする。「保育園児描画データ指標の経時的推移の調査研究(末次, 2021)<sup>5)</sup>」で用いた指標を、表1に「人物画特徴の分析指標《各指標の有無を0-1で得点化》」として示した。得られたデータについて、「(描かれた)画の性別」以外の14の指標とアンバランス1、アンバランス2の指標の経時的推移について、マクネマー(McNemar)検定により分析し、「第1期で2歳児」群、「第1期で年少児」群、「第1

期で年中児」群、「第1期で年長児」群の経時的推移をまとめた。表2に、経時的推移の分析結果より、有意な変動が見られた指標を整理して示した。

① 「鼻」の描かれていない描画

特徴的な描出として、まず①として「鼻」の描かれていない年長女児の描画を取り上げる。

「鼻」の描出について

「鼻」については、加藤・山田(2010)<sup>4)</sup>が、年長児であっても鼻を描かない事例が目立つとし、これをテレビや漫画などの影響ではないかと指摘している。筆者がすでに実施した保育園児を対象とした調査でも、年中児の前半期から後半期にかけて「鼻」の描出が有意に減り、「鼻」の出現が遅いというよりも、一旦出現していたにもかかわらず、出現しなくなるという特徴が浮き彫りになっている。自分の身体感覚が主導するのであれば、「鼻」は主要な感覚器官であり存在感の大きさは時期によって変化はしないと推察される。しかし、調査の結果から、加藤・山田(2010)<sup>4)</sup>の指摘のように、テレビや漫画、あるいはその他のメディアツールから視覚的に得る刺激が自らの身体感覚を上回り「目」と「口」中心の描出に年齢と共に偏っていく傾向が示唆されたことをまとめた(表2)(末次, 2021)<sup>5)</sup>。今回の幼稚園児を対象とした調査においても、「鼻」の描かれていない画が年長児で目立っており、視覚的に得る刺激が自らの身体感覚を上回り「目」と「口」中心の描出に年齢と共に偏っていく傾向を一層裏付ける結果となった。

昨今では、スマホ、iPadなどの、小型でどこにでも持ち運ぶことができるツールを通し電子画面を始終見ている幼児の姿を頻繁に目にするようになった。加藤・山田(2010)<sup>4)</sup>の指摘以降、電子機器文化は加速しており、刺激の影響は膨らんできている可能性が高く、重視すべき点であろう。

② 顔・頭部の強調が目立つ描画

特徴的な描出の②として、顔・頭部の強調が目立つ幼児の画を取り上げる。

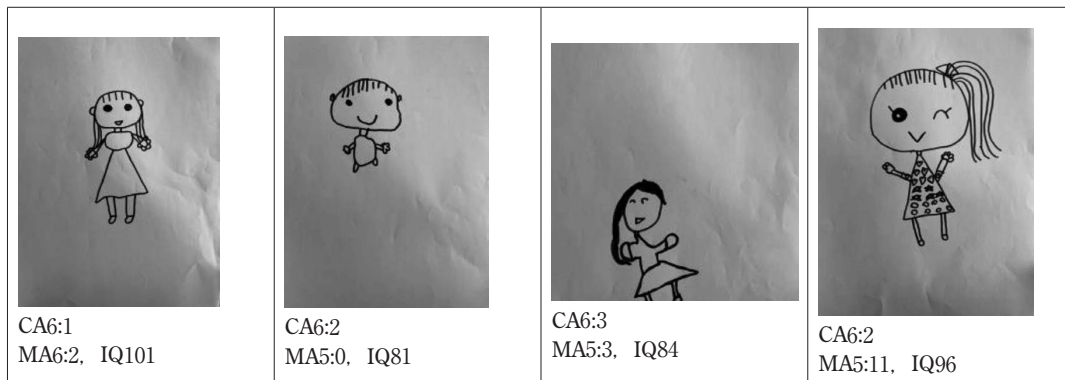


図2 鼻が描かれていない年長女児の描画

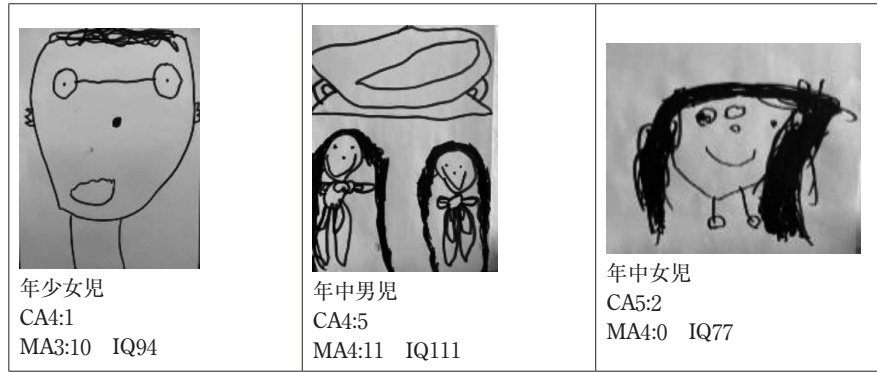


図3 顔・頭部の強調が目立つ幼児の描画

#### 顔・頭部の強調が目立つ描出について

川越ら (2011)<sup>6)</sup> が、最近の子どもの人物の描画特徴の一つとして「頭が大きい」と指摘しているように、頭でっかちで手足が貧弱な人物描画が目立ち、発達上のアンバランスさのある子どもとの描画の違いがあいまいになってきていることが危惧される。

保育園児を対象とした調査(表2)(末次, 2021)<sup>5)</sup>でも、2歳児期の終わりから年少時期の後半期にかけて、毛髪を描く子ども、手足を描く子どもが有意に増えた。加えて、毛髪や服、装飾への意識は手足に比して高い傾向があるという結果が明らかになった。

今回の幼稚園児を対象とした調査においても、事例のように顔・頭部が強調され、手足の貧弱な画があり、K児、L児、のように、年中時期の、より強調された毛髪などは、アンバランスな傾向を一層印象付けるものであった。

#### ③ 躍動感の乏しさが感じられる描画

特徴的な描出の③として、躍動感の乏しさが感じられる年長男児・年長女児の描画を取り上げる。

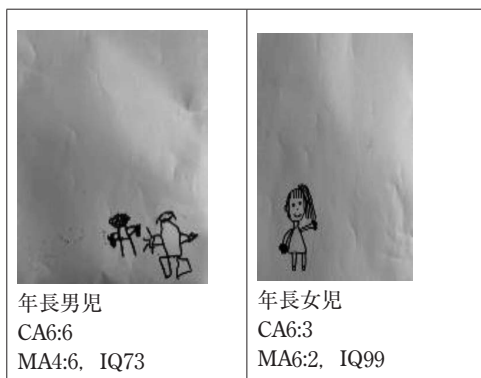


図4 躍動感の乏しい年長児の描画

#### 躍動感の乏しさが感じられる描画について

筆者(2021)<sup>5)</sup>がすでに調査してまとめた保育園児の人物画の調査と比較すると、特に年中児、年長児と、上の年齢に上がるほど、今回対象とした幼稚園児の描いた人物画は、どこか躍動感に乏しい印象がぬぐえなかった。

つまり、年少児では感じられる画が多かった、外に向けられたエネルギーは、年長児ほど弱くなっていた。

#### 4. 考 察

本研究においては、幼稚園園児を対象としており、起床・就寝の時間をはじめとする生活リズムは、子どもを中心に、安定的に保たれている印象を受けた。しかし、保育園に比べると家庭で過ごす時間が長い分、各家庭の、子育てにおける価値観の差が、子どもに大きな影響を与えているのではないかと推測できた。例えば、年少児では、習い事をはじめているケースは数例であったが、生活習慣調査の「今後実践したいこと」として、様々な習い事が挙げられていた。そして、実際、年中児、年長児では、すでに多くの子どもが習い事をはじめていた。

今回、幼児の心理的発達を見ていくツールとして人物画に着目した。筆者(2021)<sup>5)</sup>がすでに調査してまとめた保育園児の人物画の調査と比較すると、特に年中児、年長児と、上の年齢に上がるほど、今回対象とした幼稚園児の描いた人物画は身体全般が整っており、「バランス良く」描かれている画が多かった。しかし、どこか型にはまった印象、躍動感に乏しい印象がぬぐえなかった。つまり、年少児では感じられる画が多かった、外に向けられたエネルギーは、年長児ほど弱くなっていた。

鬼丸(1981)<sup>7)</sup>は、子どもの描出は、「跳んだりねたりする動きに富んだ身体性、律動感に充たされた内面性の自然な発露」であるとし、その発露は、「子供がのびのびと画を描く行為に熱中して入れば、おのずとその表現の中に現れてくる性質のもの」と述べている。さらに、「児童画の表出性は、身体性の感覚すなわち体性感覚の強度と一致する」と説き、子どもの意識は視覚性よりも、身体性に基づくものであり、内から促す必然性がなければそれは視覚化されることはない、とする。

筆者(2021)<sup>5)</sup>は、保育園児を対象とする描画調査で、表1のように、独自の指標を作成して人物描出の経時的推移を分析した。その結果から、「子どもは、はじめ、身体感覚主導型で描画表現を行うようになるが、次第に、周囲を取り巻く文化的背景や生活環境の影響を受けるこ

表1 人物画特徴の分析指標（各指標の有無を0-1で得点化）  
 保育園児描画データ指標の経時的推移の調査研究（末次，2021）より

指標	「(描かれた) 画の性別」「目有り」「口有り」「鼻有り」「耳有り」「手が棒」「足が棒」「手も足も棒」「手も足も肉付き」「手も足も無し」「手か足に指」「毛髪有り」「服有り」「頭に装飾有り」「服に装飾有り」		
アンバランス指標	アンバランス1	「手も足も棒，または手か足が棒，または手も足も無し」かつ「髪有り」「服有り」「頭に装飾有り」「服に装飾有り」で1つ以上あるもの	直接の身体感覚と直接の身体感覚とは異なる物とのバランス
	アンバランス2	「手も足も棒，または手か足が棒，または手も足も無し」かつ「髪有り」のもの	外界のものではないが身体感覚とは異なる「髪」と、直接の身体感覚とのバランス

表2 経時的推移の分析結果から、有意な変動が見られた指標のまとめ  
 保育園児描画データ指標の経時的推移の調査研究（末次，2021）より

5%水準で有意な変動が見られた指標	「第1期で2歳児」群：第2期から第3期の「手足無」（有意に減った），「髪有り」（有意に増えた） 「第1期で年少児」群：「手足無」（有意に減った） 「第1期で年中児」群：「鼻有り」（有意に減った），「手足肉付き」（有意に増えた）
10%水準で有意な変動が見られた指標	「第1期で2歳児」群：第2期から第3期の「目有り」「服有り」「アンバランス1」（いずれも有意に増えた） 「第1期で年少児」群：第1期から第2期の「目有り」（有意に増えた），第2期から第3期の「服有り」（有意に増えた） 「第1期で年中児」群：第1期から第2期の「手が棒」（有意に減った），第2期から第3期の「手足肉付き」（有意に減った），「服有り」（有意に増えた）

とで、視覚主導型に移行して、自分の身体像の獲得が不安定になってしまいやすい」ことをまとめた。昨今は、子どもが身体感覚を豊かに耕す経験を積むことや、人の中で互いに触れ合いながら、多様な関係性を深く育む機会を得にくい。それゆえ、子どもが子どもらしく遊びを通した直接体験から身体感覚を養い、多様な人間関係の中で様々な感性を育てていくことを、意識的に促していくことが欠かせない。子どもを支える立場の大人は、このことをしっかりと踏まえ、目先の情報に惑わされたりすることなく、真に子どもの心身の健全な発達を促していく環境を整えていくことが重要であろう。

また、筆者（2020）<sup>8)</sup>は、「保育者へのコンサルテーションと人物画の活用の実際」において、事例の分析を通して、発達のな特徴を抱える子どもの発達支援においては、子どもの身体意識の形成を支えることがまず必要であり、そのためには日常的な保育の中での身体活動や感覚を豊かに刺激する体験は非常に重要であること、その前提に、子どもの人物画の描出が、子どもの状態像を理解する上で役立つことを明らかにした。こうした支えと並行して母親の不安に寄り添っていくことによって、母子関係の支援にもつなげていく、子育て支援、母子の関係性への支援にも、人物画を通した理解が有効的に機能することが明らかとなった、と結論付けている。

今回は、特に、幼児の生活習慣と心理的発達との関連に着目し、その関連を視覚化する情報としての人物描出を、各事例を整理することで見ていった。図5に示すように、保育の現場においては、保育者はまず目の前の子どもを理解することが前提として必要である。その一人

ひとりへの理解に基づいて日々の保育は展開されなければならない。同時に、保護者に対する適切で具体的な助言も重要である。保護者がわが子を理解して受けとめ、親子の関係を深め、子どもの成長発達を支えるかわりによって家庭生活を送ることができるよう、保育者による支援は不可欠とも言える時代となっている。子どもの健やかな心身の発達のためには、子どもの身体のリズミ

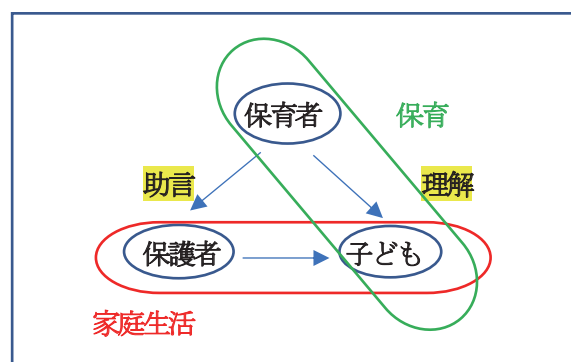


図5 保育者による子ども・保護者へのかかわりの図式

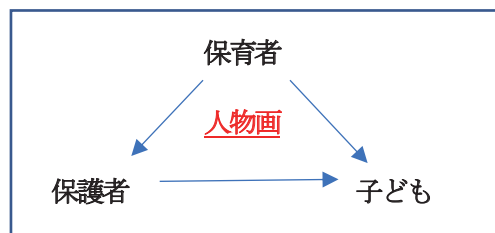


図6 保育者による子ども理解と保護者への助言に介入する人物画

カルな発達を促進する生活習慣，身体感覚が構築される豊かな直接体験を重視する必要がある。保育の現場でも，家庭においても，このことを重視して子どもの育つ環境を構築していく必要がある。図6には，保育者による子ども理解と保護者への助言に，視覚的情報として人物画を介在させる，ということを図式化して示した。保育者が，子どもの人物画描出を，心身の状態を示唆する一つのツールとして有効的に生かすことによって，日常の保育と，保護者への助言が，より子どもの心身の発達を促進するものにつながっていくのではないだろうか。

#### 文 献

- 1) 郷間英世・大谷多加志・大久保純一郎 (2008). 現代の子どもの描画発達の遅れについての検討 奈良教育大学 教育実践総合センター研究紀要, 17巻, 67-73
- 2) 鈴木みゆき・野村芳子・瀬川昌也 (2003). 5歳児の睡眠—覚醒リズムと三角形模写 日本小児保健学会講演集 P.616
- 3) 倉原弘子 (2017). 幼児の描画発達における一考察—幼児の描画発達と睡眠—覚醒リズムとの関連性— 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要, 第49号
- 4) 加藤寿宏・山田 孝 (2010). 現在の子どもの人物画—日本版ミラー幼児発達スクリーニング検査およびグッドイナフ人物画知能検査の標準化データとの比較— 作業療法, 29(6), 743-752
- 5) 末次絵里子 (2021). 幼児の人物画の縦断調査 広島文化学園短期大学紀要, 54, 35-56
- 6) 川越奈津子・郷間英世・牛山道雄・池田知美・郷間安美子 (2011). 現代の子どもの描画発達についての研究—保育園幼児のグッドイナフ人物画知能検査による検討— 小児保健研究, 第70巻, 第2号, 257-261
- 7) 鬼丸吉弘 (1981). 児童画のロゴス 勁草書房
- 8) 末次絵里子 (2020). 保育者へのコンサルテーションにおける子どもの人物画の有効性 大阪総合保育大学紀要, 14, 97-111

#### Summary

The relationships between lifestyle habits and psychological development in infants were examined based on use of draw a man to visualize these relationships. In daily nursery care, childcare workers first need to understand children to take care of them. That is, nursery care should be provided to each child based on an understanding of their individual characteristics. At the same time, it is also important to provide their parents with appropriate and concrete advice. Support by childcare workers is increasingly necessary for parents to understand their children, deepen relationships with their children, and have a family life that supports growth of the children. For healthy psychological and physical development, sufficient direct experiences should be provided to children to permit lifestyle habits and body sense to be established, since these attributes promote rhythmic physical development. Therefore, there is a need to develop an environment in which children grow up both at nursery school and at home. Draw a man made by children are useful as visual information that allows childcare workers to understand children and provide advice to parents. Effective use of these drawings by childcare workers as a means of revealing the physical and mental status of children facilitates daily nursery care and advice for parents, and may promote psychological and physical development of the children.